
魔女と僕と魔女

太陽サン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と僕と魔女

【Nコード】

N4265BA

【作者名】

太陽サン

【あらすじ】

東京の真ん中、大都会にある塔で少年が魔女を目指す話です。

魔女への一歩

東京、大都会の上空で僕は落ちた。
飛行船から都会のビル群へ。誰かに落とされた気もするが忘れた。
そんなことより僕にとって、人生を決める大切なことがおきた。

『ガシッ』

上空で落ちる、僕の手を誰かがとった。
それは、大きな白い翼を生やした人。
夕焼けに映るその白い美しい姿はまるで。

「天使……」

僕はそうつぶやいた。

「ぶーぶーはずれ！あたしは魔女だよ。」

彼女は陽気に、笑いながらそう言った。

僕はあのとき、あの瞬間決めたんだ。

魔女になるって。

彼女のような魔女に。

10年後

2017年東京

大都会東京の、ど真ん中に大きな塔があった。

それは、全長一万メートルの窓もないの飾りっ気もない殺風景な塔であった。

50年前まで、大東京タワーと呼ばれていたその場所だ。

その高い高い塔の足元に、一人の少年は立っていた。

塔を見上げるようにして、少年は塔を見て感動しているようだった。

「俺はここで・・・魔女になってみせる。」
そう静かに力強く、少年はつぶやいた。

50年前までこの一万メートルの窓もない飾りっ気もない殺風景な塔の、巨大な塔の扉が開かれた。

それは歴史上初めてのことである。

いや、人間の歴史上初めてのことである。

人間が存在する前の歴史には、この塔の扉は開いていたのかもしれない。

ようは、この塔は人間が存在する前からあったモノなのである。

それは、歴史上のあらゆる文献と。それを研究した歴史家によって証明されている。

『死の塔』

『まやかしの塔』

『神の塔』

『大東京タワー』

さまざまな時代で、さまざまな呼ばれ方してきた。そしていまの名称は、魔女学校。

魔女を育成するための、専門機関である。

この塔が、魔女学校と呼ばれるようになった経緯は、この塔の扉が初めて開いた50年前にさかのぼる。

それまで、この塔は不可侵にして絶対硬度を誇り、扉を開けることも塔を破壊することもできなかった。

そして、東京のド真ん中に。絶対的な塔として君臨していた。

だがある日、その塔の扉が開いたのだ。音もなく予兆もなくただ平然と、全長300メートルの塔の扉がひとりで。

戦後日本は、疲弊していた。

だがその話題は日本中。いや世界中を駆け巡り、観光の目玉として連日数百万単位の観光客が、塔のまわりに押し寄せていた。

だが、誰も扉の奥に誰も入らなかった、いや入れなかったのだ。

扉がまた閉まったのではない。扉が開いているのに入れなかったのだ。

まるで扉が開いた場所に、もう一枚の见えない分厚い扉が存在するかのよう。

その见えない扉も不可侵にして破壊することもできなかった。

见えないのだから、当然のことだが。

そして、人々は、塔への侵入あきらめ。興味も徐々に薄れていった。そして、それから半年がたち。

この塔の扉が、開いているのがめずらしくもなく、あたりまえで见なれた光景になった頃。扉にある言葉が映しだされた。

それは、以前の開かずの扉ではなく、いま存在しているが、存在するはずのない、见えない扉のほうにである。

その文字は、宙に浮くように、白く発光して映しだされていた。

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。』

この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

それ以来ここは、魔女学校と呼ばれた。

そして時は流れ。2017年東京。

現在、魔女学校は、通称魔女学と呼ばれ。この世界にもっとも重要な場所として存在していた。そして、この全長1万メートルの、塔の足元に、一人の少年はいた。少年は、塔にあることをしていた。

「んーんー！」

はるか50年以上前に、人々がしていたことだ。

「んはー」

それは、閉まっている塔の扉を。

「んばー」

無理やり開けよとすることだ。

少年は力いっぱい、全長300メートルの扉を、無理やりこじ開けようとしていた。

「んがーーーーー!!」

少年は、120%の力を込めた。

.....

ダメだった。

「はあはあやつぱり開かない・・・俺には魔力はあるはずなのに・・・
変だなあゝ噂では、魔力があれば開けられるはずなのに。」
ふいに後ろから。

「それは、違うわ」

「!」

声をかけられた。女性の声だ。振りかえるとそこには。

真面目でやさしそうな少女と、おとなしくどこか気弱そうな、二人の少女が立っていた。

（めずらしい制服だ。どこかでみたことがある・・・たしか・・・
なにのかパンフレットで見たような・・・そうか!魔女学の制服
!といことは、このふたりはこの生徒で魔女見習い?)

真面目でやさしそうな少女は、俺の目のまで歩いてくると、そこそこ膨らみ

のある胸に手をおき、自己紹介をしてきた。

「樹よ、神原 樹、かんばら いっきそしてこの子は藍原凜、あいはら りん樹達はここの生徒なの、
あなたは誰?どうして扉を開けようとしたの?」

すこし答えるのを迷ったが、すぐに答えた。

「お・俺は黒羊 祭です。開けようとしていた理由は・・・」

「黒羊!」

急に、樹さんが驚いた顔をした。

「あの・・・どうしたんですか?」

樹と名乗る少女は、あきらかに少し動揺していたが。すぐに、平静を取り戻し。

「うつん・ごめんなさい。なんでもないわ、ちょっと知っている

苗字だったから。」

「そうですか？」

「それで？あなたはどうしてもこの扉をあけたいのかな？興味本意かな・・・」

それとも力試し？もしかして不法侵入が目的かしら、ふふ」

「違います！俺は魔女になりたいんです！」

俺は堂々とキツパリ答えた、いつもどおり。

「魔女に？」

「はい！」

俺は、バカにされることを覚悟した。当然だろう？

男が魔女を指摘そうとしているのだ、それは仕方ないことだ。

傷つくが、俺はその、悔しさをバネに、余計にその夢を叶えるため努力した。

（たしかに、世間から見れば、馬鹿なことなのかもしれない・・・でも、きつと、叶えた時に誰もが、認めてくれるとそう信じている。）

現に、一人いてくれたのだから。

俺を育ててくれた、ばっちゃんは。

「嘘をつきなさい。そうしないと友達ができないわよ」
そう言った。

実際、友達はいままで一人しかできなかった。

それでも、そのたった一人の友達は、理解してくれた。認めてくれた。

俺に、きつとなれると言ってくれた。

それは、俺にとってなによりも救いになっている。

自分の夢を言葉だけでも、捻じ曲げれば、きつと傷つかずもつと友達できたかもしれない。

そうかもしれない。その通りだ。

それが正しい選択なのかもしれない。

だが、俺は曲げたくなかった。

夢だけは。

俺の信じた夢を、友達が信じてくれた夢を、ごまかしたくなかったから。

それにもし、ばっちゃんが言うように、魔女を目指すという夢を、誰に語らず秘密の夢としていたら、あのかけがいのない友人はできなかったかもしれない。それは絶対やだ。

この真面目で、やさしそうな神原樹さんは、どう思うのだろう。

後ろの藍原凜さんは、びつくりした顔をしてる、たぶんあまりいい感情をもたれていないだろう。

自分勝手な考えかもしれないけど、俺はこの学校で魔女を目指すうえで、一人くらい俺の夢を理解してくれる友人がほしかった。友人ではなくても奇異の目でみないそんな人を

「そっか祭君・・男の子がなのに魔女になりたいのかー」

「はい変ですか？」

「いいえ、変じゃないわ。がんばって！男の子とか関係ない・・夢を信じればきつとなれるわ。」

そう言って彼女は、やさしくほほ笑んだ。

嬉しかった、バカな夢かもしれない。でも大切な夢を、彼女は応援してくるとまで言ってくれた。涙が目に溜まるほど、うれしかった。

二人目が現れたのだ。

「ありがとうございます！」

俺は嬉しさのあまり、全力でお辞儀した。

「えっ？・・・あっ・・・はい・・・」

彼女はすこし困惑した顔で、俺からの一方的な、うれしさをその身に受けた。

一話 2

そして彼女は、少し考えるような姿勢をとると、一言。

「しってるかな？」

「え？何をですか？」

「この言葉を・・・」

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。
この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

「それはたしか50年前の・・・」

「そうよ、50年前に、この扉を開けたあとにある見えない扉に書かれていた一文よ。」

「たしか、それから数力月後ですよ？ここが魔女学校と呼ばれるようになったのは？」

「そう・・・初めはこの扉は、常時開きっぱなしになっていたらしいの。そして魔力を持ち、塔の中に入る者すべてに、魔法を教えていたらしいわ。」

『スっ』

つと樹さんは、俺の頬に両手に手をあて、目をつぶった。

（まさかキス！！）

すると、隣にいた藍原さんが慌てて言う。

「キスじゃないからね！樹ちゃんは、あなたに魔力があるかどうか、探っているだけだからね！勘違いしないでね！」

隣にいる藍原さんにすごい剣幕で怒られた。

ものすごい敵愾心むき出しで言われた。

（すいません、勘違いしてました。）

「感じるわ、あなたから・・・」

「えっ！」

「魔力を……」

「嘘、そんな……男の人は魔力を持つてないはず。ありえないよ」

俺はいままで、魔力があることに、なにも疑問もなく生きていたから、男が魔力をもっているのがそんなめずらしいことだとは思わなかった。

（男が持つているのは、そんなにありえないことなのか？）

うん！これであなたにはこの塔に入れる条件を満たしていることがわかったわ

あなたには魔女になれる資格があるわ」

「でも男だよ……樹ちゃん」

男とか女とか関係ないわ。

「でも……他の人がなんていうか。」

目を伏せながら藍原さんがそう言う。

「凜、あなたは他人の目を気にしすぎよ」

「……わ……わたしは……」

やさしい口調で。

「人はね、誰かのために生きてるんじゃない、自分のために生きているの。だから、他人がどうか関係ない、自分がどうかなのよ……」

でも人は、一人では生きていけない。だから樹たちは友達なの……」

「樹ちゃん……」

強い口調で。

「でも一人で乗り越えなくちゃいけないこともある。でも一人じゃない……」

あなたがもし、その自分の殻を出たいときは、相談して……。一人で抱えないで。

悩みが違ふ以上、一緒に乗りこえることはできないわ……。でも乗り越える手助けくらいはできる……。だって私たち一生の友達でしょ？」

「うん・うん・ありがとう樹ちゃん・・・」

涙に顔を濡らしながら、藍原さんはうなずく。

「あんたのためなら、どんなことでもするわ。」

そう彼女を抱きかかえながら、頭を撫でてあげている。

そしてこちらを見て。

「あなたもよ、祭くん。もしなにかあったら、樹に相談して。

なんでもものるわよ、もしあなたに、魔女になる資格がないという人がいれば、樹がその人にわからせてあげる。もちろん力すくじやないわよ、ふふ、言葉でね。」

うれしかった、自分のことをわかって認めてくれた。

いままでこんなに認めてくれたのは、2年前に別れた幼馴染くらいだ。

樹さんはまごうことなき、正義の味方気質だ。

この人は、たぶん誰にでもやさしいだろう。誰にでも味方するのだろう。

きつと悪にさえ。

この人は、どんな悪にも、罪を憎んで人を憎まずを体现するだろう。どんな悪だろうと許し。

助けを求められれば、時と場合によっては助ける。

正真正銘の正義の味方。

かつて、漫画やアニメであこがれた、あのヒーローを彷彿させる。

「樹さんってなんか、正義の味方みたいですね？」

樹さんは驚いて顔で

「え？正義の味方？どうしてそう思っの？」

「えっと・・・あの？なにか気を悪くしたか？」

俺は、心配になり尋ねる。

「いや・・・あははちよつと・・・じゃなくて、かなり嬉しくて・・・」

「うれしい？」

「実はね・・・樹の夢は、正義の味方になることなの!」

「え!」

「この夢はね、人にあまり理解されないの・・・子供っぽいとか、かつこつけとかよく言われるわ。そんなことは気にしないつもりだけど、やっぱりいわれればちよつと傷つくわ・・・」

「・・・」

「いいの・・・そうかしれないことは、わかるわ。でも樹にはね・・・ずつとなりたくて、あこがれて人がいるの。その人みたいに、悪から人を守り!その悪さえ許し、更生させる!そんな正義の味方になろうつて、子供の時からずつと決めてるの!」

だから、樹が目指す夢を、あなたに言い当てられたことが、とつてもうれしかったの・・・だって

そうでしょ?自分の夢を理解してくれる・・・共感してくれる・・・これほどうれしいことが、この世の中にあるのかしら?」

「わかりますその気持ち!」

メチャクチャ共感した。

「・・・」(私のほうが、樹ちゃんのことずつと前から、ずつと深く理解してるもん。)

「樹は貫き通すわ!どんなに笑われても、傷ついても、理解されなくても・・・この夢だけわねニコ)」

(本物だ!彼女の信念は本物だ。)

俺も、夢に関しては誰かに負ける気はないけど。

彼女の意志の強さを、まじかで見ていると圧倒される。

夢という個人個人がちがう、曖昧で大切な物で争うつもりはないけど。

それでも彼女に思いに激しく感化される、心の奥底で負けたくないと思う自分もいた。

「夢のため、お互いがんばりましょう樹さん!」

「ええ祭君!」

お互い手を取り誓い合った。それはまるでアニメやドラマの理想のライバルシーンを描いた、ワンシーンにさえ思わせる。

理想のライバルそれは、たがいに感化し影響し伸ばしあう、人の繋がりで人は、強くなるものなのだ。

（これが魔女を目指すってことか・・・）

実際、ライバルという無縁な人生を送ってきた彼には、こういう関係はフィクションであり、現実のこの世界ではないものどこか思っていた。だからこそ嬉しかった、ありもしないあこがれた関係がいま築かれたのだから。

「はいはいはいはいはいはい」

いきなり、奇声をあげ藍原さんが、俺達の間割って入った

「わたしもわたしもーめざすー！ー！ー」、

最初の印象では、おとなしく気弱そうな女の子、それが藍原さんへの俺の第一印象だ。

だが顔を赤くして、両手をあげながら奇声に近い声で叫ぶ。彼女を見てみると、俺の最初の印象はどうやら間違いだったようだ、訂正しないと。

「私も、樹ちゃんみたいに正義の味方になる。私ね！わたしね！樹ちゃんのためならなんでもするの！だから私のことも、頼りにしてね・・・樹ちゃん」

「ありがとう凜」

そして藍原さんは、弱よわしくだが、こちらをキツとにらんできた。敵愾心むき出しである。

「あはは（汗）」

（なにか、ちがう意味でのライバルと思われる感じだな～あなたには負けないぞ！そんな気合いを感じる。）

そんな藍原さんに、凜さんはやさしく。

「こらっ・・・凜・・・やきもち焼かない。」

「うっつ！？やきもちじゃないよ~~~~~うっつ」

心の内を読まれて恥ずかしいのか、藍原さんは真っ赤になって涙目

になって反応した。

そんな藍原さんを今度は、諭すように凜さんは。

「一番大事な友達はあなたなのよ。」

「はうつ（かあああ）」

「ずっと側にいてくれた。だからこれからもずっと側にいてもらうわ。誰よりもあなたを信頼してる。ずっとずっと二人でがんばろう

（ニコ）」

「うんうんうんうんうん」

藍原さんはすぐうれしそうだ。

（この二人からは、友人以上の繋がりをを感じる。）

それは、一緒に夢を目指すという、友人同士の語りであったが。

だが藍原凜は、夢を目指すというより、好きな友達の真似をしているだけにすぎないように感じる。

本当に正義の味方になりたいかも不明だ。だがそれも、一つの夢の形であろう。

『大切な誰かの真似をしたい。』

『あこがれる誰かみたいになりたい。』

こういう過程があつてこそ、黒羊祭や神原樹の、今があつたのかもしない。

夢の初めは、どんな入り方でもいい、ようはそれを、最終的に自分の夢として、確固たるモノにできるかどうかだろう。

たとえばできなくても、好きな友人の真似だけだとしても、それをだれが非難できようか。

所詮、人は一人で生きられない。誰かを求めてします。

『繋がり』

人がそれを得ようとするのは、必然であり欲求であり、義務なのだ。神原樹は、それはわかってるのだろう。

ただ、無二の親友を、かけがいのない友達を頬笑み、受け入れていた。

その友人同士の、ほほへましい繋がりを見て。黒羊祭はいまはいな

い、手紙と電話だけのやり取りの幼馴染のことを思い出した。

1話3

魔女になったら、きっとまた会いにいく。

きつと胸を張って、あの時の約束を守るから。

そう、彼が思い出に浸っている時。

「祭君。」

樹さんが、話かけてきた。

「！・・・は・・・はいなんでしょう。」

「残念だけど、あなたは魔女にはなれないわ。」

「ま・・・魔女になれないって・・・どういうことですか？」

「ごめんさい、さっきあなたには、魔女になれる資格はあるっていただけ、なれない理由があることを、ド忘れしていたわ。」

「しかたないよ・・・樹ちゃん、男の人がいきなり魔女になりたいなんて、言ってきたんだから・・・魔女になるための、もうひとつの条件をド忘れしていても。」

「もうひとつの条件・・・そ・・・それは、一体なんなんですか？」

樹さんは、申し訳けなさそうに。

「・・・昔はね、この魔女学への入学条件は、魔力を持っていることだけだったの。」

いついかなる時期でも、この塔に入れさえすれば、いつでも入学できたわ・・・でも今は違う。

昔は常に関ければっなしになっていた、この扉も、ここの生徒しか開けられない。

そして、この魔女学で、魔法を教わることでできる者は、1年に1度・・・3月3日、この扉の開放日にこの塔に入れた者だけなのよ。残念だけど今日は、5月10日。ここに入学して、魔女見習いになりたいのなら、来年の3月3日まで、まで待つ必要があるわ。

それから魔女を目指しても遅くないんじゃないかな？」

「・・・でも俺は・・・いますぐ魔女になりたいんです！」

「・・・・・・・・気持ちはわかるけど・・・・・・・・」

「やっと・・・・・・・・沖縄から、旅費をためて東京にきたんです！」

「ここで魔女をあきらめたら、またいつここに来れるかわかりません。だからオレは、今日いますぐ、この魔女学に入学できるよう、この学園長に直談判してきます。」

「・・・・・・・・」

樹さんは感心したように。

「すごいわね・・勇気があるわ、さすがだわ祭君。」

「そ・・そうですか・・」

すこし照れくさい。

「ええ・・あの学園長に直談判だなんて・・」

「あの学園長・・」

「超有名だから知らない訳じゃないでしょ？噂では学園長は、何千年も生きている不老不死らしいの」

え？

「この魔女学は、50年以上前まで大東京タワーといわれる場所だったわ。開かず壊せず、ただ存在するだけの塔だった。その頃からこの中にいたという噂よ学園長。」

「!？」

「魔女学校学園長メフェス ヴアンパイア・・」

彼女は、50年前からここで魔法を教えている。

「いまでは先生職は卒業生の生徒にまかせいるけど、それからいままですつとこの塔で、学園長として容姿は一切変わらず存在し続けている。」

「みんながこぞつて噂したわ、学園長は不死ではないかと、この扉が開く前から、この塔の中にいたんじゃないか？」

「実はこの塔に封印されている化け物で、人間を墮落させるため、魔法という禁断の果実をもってきた悪魔じゃないかって、いろいろね」

「・・・・・・・・（ぶるっ）」

「この塔は、人が存在する前からあった、もしかしたらここを作っ

たのも彼女で、ずっとこの塔の中に生き続けているのかもしれない。
・授業は先生だけだし、樹はまだちゃんと一度も見たことはないから、確信はないけど・・・」

「・・・」

「い・・・樹ちゃん！」

「！」

「・・・大丈夫？祭君？」

「へ？」

「・・・顔が青いわよ・・・？」

樹さんは、心配そうに、顔を覗き込むように見つめてきた。

「もしかしていまの話・・・全然しらなかった？」

俺は慌てて。

「ち・・・違います！知ってました。これは侍者青いです！」

（武者青いつて何！それをいうなら武者ぶるいだ！）

「ご・・・ごめんなさい知らなかったみたいね。（しょぼーん）」

演技は、バレバレだったらしい。恥ずかしい。

「樹のせいで・・・怖がらせちゃったみたいね（しょぼーん）」

樹さんは、本当に申し訳なさそうだ。

「い・・・いえ・・・へっちゃらです。これから歴史上初の、男が魔女を目指すんですから。」

倒してみせますよ、学園長を！」

「えええ！？」

「ま・・・祭君！祭君！倒しちゃダメよ！ダメよ！学園長なんだから！（汗）」

「あっ・・・そ・・・そうでした・・・すみません」

情けないことに、かなり動揺してしまっているらしい。

（不老不死・・・化け物・・・そんな相手に直談判・・・）

でも・・・知らないより知っていたほうがいいはず。交渉する上で、相手のことを知らないより、知っていたほうが、断然有利にことを運べるだろう。）

なら、相手が相手だけに、それだけの気概と気合いが必要だろう。
俺はあらためて、自分に渴をいれる。

『渴!』

その心境とは裏腹に、顔はまだ青かった。

「祭君・・・」

「!」

彼女は俺に近づき、震える俺の手をとった。

「樹さん？」

「!・・・樹ちゃん・・・まさか!？」

そして俺の手のひらに、指で人の字を書くと、それを。

『ぺ口』

「!?!?!?」

(舐めたああああ!!?)

「お母さんがね・・・よくやってくれたの樹に、こうやって手のひらに人を書いて舐めると、緊張がほぐれるって」

(樹ちゃん!それは自分で舐めるものだから!わたしもやられて、嬉しかったけど!)

俺は。

(女の子に初めて、手のひらを舐めれた・・・)

あまりの衝撃に、さきほどの恐怖はすべて吹き飛んでいた。

「いいいいいいっ・・・樹ちゃん!汚いよ!舐めたら!」

「あっそうね!ご・・・ごめんなさい!祭君・・・いきなり手を舐めてしまつて、汚かつたでしょ?」

「そ・・・そうじゃないよ」

藍原さんは、慌てて急いで、樹に自分のハンカチを差し出した。

「ありがとう凜」

それを。

「はい、コレを使って祭君」

俺に渡した。

「！そつぢゃないよ！樹ちゃん！」

「え？」

「あ・・あの、いいですから・・気にしてませんから」

「そう・・ごめなさい。あなたが・・死んだ母に似ていたから、
ついね」

（容姿だろうか？それとも雰囲気？）

「いえ・・俺、勇気出ました。頑張ります」

今度は、心の底からそう言えた。

「よかった」

「樹ちゃん！」

「ん？何？」

「そろそろ時間だよ・・授業遅刻しちゃう」

「あ・・そうね・・もうこんな時間！」

樹さんは、時間を携帯で確認した。

「ごめんさい祭君、こんな所で長々と立ち話して」

「いえ」

「じゃあ樹達はいくわね、扉は開けておくから、がんばってね」

「はい！」

そう言々と樹さんは、閉じた扉の前にいくと、スッと手を、やさしく触れた。

すると、300メートルはある、開かずの扉は、音もなく容易に開いた。

その静けさに、まるでいままでずっと開いていたかのような、雰囲気さえ感じた。

「樹さん？あの・・扉はどうすれば閉まるんですか？」

「ん・・2、3分もすれば勝手に閉まるわ」

「そうですか。ありがとうございます。」

「また会いましょう祭君・・教室で」

「はい樹さん」

樹さんも、このことは言っでなかった。たぶん知らなかったんだろ
う。知っていたらきつと、彼女の性格なら、絶対教えていたはず！
「くそっ！こんな所で引けるか！」

（今日ここに入るって決めたんだ・・・あきらめるか！逃げてたま
るか！こんな所で、後ろを振り返る余裕なんて、いまの俺にはない
！前につき進め！歩みを止めるな！このまま学園長室まで突っむ！
！）

彼は、ゴーレムに群れに追われながら、塔の中に男子初の侵入をと
げた。

1話4

「はあはあはあ・・・」

（反則だあ。この塔ゴレムだけじゃなく、あんな撃退システムがあるなんて・・・よく生きてたなあ・・・俺。）

深さがわからない落とし穴。

それに超高速で飛んでくる鎌。

部屋に逃げ込んだら、閉じ込められ水攻め。

そのたもろもろ、トラップの数々。

何回・・・死んでたかわからない。

「くっ」

（これは試練なんだ、男が魔女のなるという、普通ならありえない偉業を達成するまえの・・・これくらい乗り越えてみせろという神の提示！）

そうぜーぜー言いながら、前向きに考えることくらいしか、今の俺にはできない。

「ぜーぜー」

それはそうだろう、全長一万メートルの塔の中で、10時間もさまよっているのだから。

祭がふらふらとさまよい歩いてると、ふと壁に。

『この先100メートル先に学園長室』

というパネルが壁に貼ってある。

（よっしゃああああ！！学園長室までもうすぐだ！！！！）

祭は涙に顔濡らし、意気揚々にスキップしながらこの先の学園長室を目指した。

（ついにここまで・・・約10時間さまよって、あと100メートル先の場所にまできた・・・全長一万メートルのこの塔で、よくこ

こまでたどり着いたものだ・・・)

彼は自分に感動していた。

(そうだ・・・俺は、こんなところで、迷っているわけにはいかなんだ！)

脳裏に10年前の、あの日のことを思い出す。

(あの日、あの時みつけた、自分の道を進むためにも・・・)

大きな白い翼、温かい手、彼女に助けられた時から、彼は魔女になると心に決めて願った。

(願ったなら止まるな、行動しろ。

願うだけならだれでもできる。

叶えるのは、願いじゃない！叶えようとする信念と行動力だ！

前を見る、後ろを振り返るな！ただ全力で、自分で決めた道を前に進め！)

そのとき。

『によきーん』

目の前の床から、これまでより遙かにおおきいゴーレムが出現した。

「なあ！！？」

(不意を突かれた！？)

ゴーレムはその巨大な拳を振り上げ、それを祭り向けて、超音速で振り落とした。

「！？・・・避けられない！」

(なら、受け止めるしかない！ 受け止められるか？否。受け止めて見せる！！)

そう祭が決意した時。

「！？」

『ザッシュッ』

ゴーレムの体が真つ二つになり、そのまま砂となって消えた。

「な・・・なにが・・・」

（どうなってる？）

なにがなんだかわからない。なにもしてなのに助かった。

（これは・・・一体どうして？）

そのとき。

「そこでなにをしている？貴様は・・・」

「！」

ボソツと言う感じの声だが、その声冷たさに、一瞬ビクつとして、体が硬直した。

俺はその冷たい声の、持ち主を見た。

そこには、この学校の制服を着た、黒髪の少女がいた。凛々しくかつこいっい雰囲気の女性だ。

「あ・・・えーと」

（どうしよう？なんていい訳しよう？俺はいま、侵入者なわけで、もしかして俺って？悪人なんじゃ？）

返答しだいでは、戦闘になるかもしれない。祭は慎重に答えを模索した。

（ここは絶対、穏便に済ませたい。）

決して、不純な動機で、ここにいるわけでないのだから。

（魔女になりたいからここに侵入したといえ、きつとわかってくれる・・・）

「はっ！」

俺はそのとき、田舎の村での、ある出来事を思い出した。

それは村のみんなに。

「俺は魔女になる」

そう夢を語った時だった。

それを聞いた一人の少年が。

「魔女学って女しかいねエーんだろ？エロ目的で入るのか？」

『ちがつー！ー！ー！』

（そんなことは断じてない！）

あのときのことを思い出して、祭は心のなかで叫んだ。
男が魔女になりたいなどと安易に言うことが、どれだけ誤解をまねくことがあの日学んだ。

あとオカマなのか？とかもあった。これが一番多い。

俺がどんな弁明したところで、誰もが俺を変態扱いした。
幼馴染には。

「必死すぎると、逆にあやしまれるぞ」

つと、ダメだしされる始末。

だが、夢を誤解されて、弁明しない人間がどこにしよう。
だが、あのときは子供だった。

『なんでみんなそんなこと思っただろう？』

そう思っていた。

だが成長して大人になった今ならわかる。

（エロ目的だ・・・俺・・・）

いや、そんなつもりまったくありませんよ。

客観的一般論では、そうとられても仕方ないということ。

（必死になっちゃダメだ！・・・よよ・・・余裕に・・・ゆゆ・・・優雅に・・・せ・・・せ・・・説得力のある、い・・・いい訳を考えなくちゃ・・・）

てんぱりまくって、きつと余裕も優雅さも説得力ない、言い訳を考えそう。

そんなこんなで、頭がいつぱいになっている俺をを無視するように、
黒髪の彼女は、祭に一步、一步、近づいてきた。

『どうするどうするどうするどうするどうする・・・
どきどきどきどきどきどきどき・・・』

もうだめだ土下座しかない！そう思った時。

黒髪の少女は、俺の目のまえに来て、口を開いた。

「おまえは……………」

『ぐうつうつうつうつうつ』

「！」

「！」

絶妙なタイミングでファンファーレがなり響いた。

それは鮮やかに美しく。

別にその場に、人工の楽器があつたわけではない。

人体の楽器、お腹の音だ。

もちろん俺じゃない、彼女のだ。

「あ…………あの…………（カアアアアアアアア）」

この瞬間、俺達の立場はなにもかも逆転したように感じられた。

彼女はものすごい顔真っ赤にしながら。

「あの…………100円貸してくれないか？たのむ……………」

（なぜ100円！？）

なぜかこの状況で、100円を要求された。

黒髪の彼女は、顔を真っ赤にしながら、目を会わせず、申し訳なさそうに目を伏せていた。

それは、お腹の音を聞かれた恥ずかしさなのか。

それとも100円を貸してくれっと、頼んだ恥ずかしさなのか。

はたまた。複合的恥ずかしさなのか。

（…………謎だ？）

俺は一番の謎を聞いてみた。

「百円をなにに使うつもりですか？」

理由はなんとなくわかったが、つい聞いてしまった。

「そ…………それは…………アン」

「アン？」

ぐうううううううううう

2度目のファンファーレが鳴り響いた。

なにも言わず俺は、そっとガマ口の財布から、200円を取りだし彼女に手渡した。

「ありがとう・・・恩にきる」

彼女は顔を真っ赤にしてすこし潤んだ瞳で、上目使いでそういった。さっきまで凛々しくかつこいい彼女のイメージはどこにもない。いま俺の目の前にいるのは凛々しくかつこいいがお腹を空かせたかわいいうな子だ。

（あんま変わってないや・・・）

いや実際ギャップはめっちゃめっちゃありますけどね。

「いえ大したこととしてませんよ・・・じゃあ」

俺はそういうと、彼女と分かれて、100メートル先の学園長室を目指すそうとした。

だが、ふと思いたち、別れ際の彼女に俺は。

「あの」

「なんだ？」

彼女はもう平静を取りもどした。

前のかっこいい凛々しいイメージに戻っていた。

（なんとという回復力！もしかして魔法？）

俺は聞いた。

「さっきのゴーレムを倒してくれたのは、あなたですか？」

「ちがう・・・私は人助けするような、善人じゃない」

「そ・・・そうですか」

（・・・・・・）

祭は少し考えたあと、何を思ったのか。

「あの・・・男がこの魔女学にいて、変に思いませんか？」

「興味ない」、

「俺はここで、魔女を、目指すそうと思っているんです。変じゃないですか？」

「興味ない」

「・・・そうですか」

さきほどの、顔真つ赤にしていた彼女は、もうそこにはいない。

ドライな顔でそう言い放った。

ぐうううううう

また鳴った。

ホットになった

「・・・もうコンビニに行く」

「は・・・はい・・・引きとめてごめんなさい・・・なにを食べるんですか？」

「アンパン」

「そ・・・そうですか」

真つ赤な顔でアンパンと答え、こんどこそ彼女は去って行った。

（なんかかわいい人だ・・・）

それが名前も知らない、彼女への俺の第2印象だ。

（でも、男が魔女を目指すといっても、全然気にしない人もいるんだな、それにいちおう、侵入者なのに、そっちも気にしてないみたいだし・・・）

「まあ世の中、差別する人ばかりじゃないってことも」

（むしろそう思っている俺こそが、差別しているのかもしれない。）

「反省しないと・・・」

（でも・・・）

後ろを振り返り、もういない彼女を思い出した。

「ほんと・・・ホットでドライな人だったな・・・」

1話5

カツカツカツ

一万メートルの塔の廊下で足音が鳴り響く。

それは、石畳みの廊下を、早歩きしてコンビニを目指す、黒髪の少女の足音だった。

黒髪の少女はお腹が減っているなか、反省をしていた。

（くっ・・・まだ未完成だなあの魔法は、あの程度のゴーレムを破壊するのに、かなりの魔力を食ってしまった。もうすこし魔力の燃費をよくしないと）

『ぐううううううううう』

「・・・・・・・・・・」

（こっちの燃費もな・・・）

ぐうううう（・・・よすぎるぞ・・・補給しないとなアンパンで・・・）

だが彼女は知らなかった、コンビニでいま、アンパンが急激に売れ切れていることを。

彼女がアンパンを購入できたのは、ここから10キロ先の55件目でのことだった

『それ以外を食べれるよ』

やだ。

そして黒羊祭は、黒髪の少女とは対象的に、廊下を忍び足で歩いていた。

100メートル先の、学園長室を目指して。

（今度はゆっくり・・・不意を突かれても避けれるように、慎重に・・・）

今度、いつまたゴーレムが襲ってきても、避けられるように、祭は最新の注意を払っていた。

だが、なにも妨害もなく、学園長室前の扉にたどり着いた。

「ふう・・・着いた・・・」

たった100メートルが、アメリカ横断に匹敵する疲労を感じた。一度したことがあるが、あのときより、命が賭かっている分、この100メートルのほうが、達成感があった。

（・・・もう、ゴーレムも襲ってくる気配はないけど・・・もしかして、侵入者迎撃システムの魔法効果が切れたのかな？）

「・・・」

（やっぱり、あのゴーレムで最後なのかもしれない。ボスっぽかったし・・・自動発動型のトラップで、時間がくれば解除されるのかも・・・）

そして祭は

スッ

目を閉じ。

「ふうー」

つと一呼吸した。

そして、目のまえの、念願の学園長室の扉を見た。

（ここが学園長室・・・）

扉の札に、そう書いてあるのだしそうなのだろう。

「ここに学園長が・・・」

（よく知らないし見たこともないけど。）

「不死の化け物か・・・」

「ゴクリ・・・・・・・・」

祭は息を飲んだ。
そして。

『ばんばんばん』

あらためて、3倍の気合いをいれた。

「よっし・・・・・・・・いくぞ・・・・・・・・つっ」

(痛い・・・
さすがにいれすぎた・・・・・・・・つっ)

がちやり

祭は、その未知の存在である、学園長がいる部屋のドアノブに、手をかけ。
その重厚な扉を開けた。

『ぎぎぎぎ』

心の中で。

(うりゃーっ!ー!)

といいながら、ゆっくり開けた。

開けたそこには、広い空間とその真ん中に、1人の女の子がいた。

きっと風呂上がりだったのだろう、タオル一丁で。
そのタオルで、頭を拭きながら。

「！」

女の子と目が合う。

すぐに目を反らした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その場に、重い沈黙が流れた。

その緊張の糸を、断絶するように女の子は。

「何者じゃお主？学園長である、わらわになんの用じゃ？」

かわいい透き通った声で老婆言葉で、とんでもないことを言った。

「学園長！！？」

（こんな子供が、タオル一丁の子供が・・・学園長！？）

なんと、目の前にいるちいさい女の子が、学園長だという。

彼の予想では、見た目おばあさんくらいを予想していた。

だが、予想は大きくかけ離れ、その容姿は子供だった。

だが納得はあった。

（・・・50年以上、この容姿なら・・・誰もが不死であろうと思うだろう・・・）

祭は困惑したが、ほっと胸をなでおろした。

（どんな怖い人かと思ったけど、なんともないこんなかわいい子供とは、心配して損した。）

祭が一瞬、気が抜いたその瞬間。

学園長は、タオルを濡れた頭に巻き、目にもとまらぬ速さで、祭の首を掴み、そのまま床に押し倒した。青向けに

（ぐうつうつつくるしい！！？）

幼児体型の学園長は、祭の胸にお尻をずっしり馬乗りして。両手で

祭の腕を抑え、床に固定した。

（なんて力だ！人間を遥かに超えている・・・こんな子供が・・・）

祭は動きは一切封じられ、床に固定され身動き一つできなくなった。

「聞いておろう？わらわが・・・お主は何者じゃと？何の用でここを訪ねたかと？・・・それと男の分際でなぜこの塔に入れた？・・・理由をまずのべよ」

学園長の威圧と、そのアレの、アッアレのせいで俺は、まともにも見れなかった。

「早く答えよボーズ」

『ゴゴゴゴゴゴ』

学園長は、さらに圧迫感を強めた。

きつと漫画なら、ゴゴゴゴゴゴという擬音が、学園長の後ろに書かれていただろう。

（きつと・・・答えを間違えれば・・・死ぬ！）

「お主・・・魔力をもっているな！・・・なぜ男が魔力を持っている、まずそれから答えよ」

『・・・それは俺にはわからない』

そう答えようと思ったが、俺は思いとどまった。

（この状況でそんな曖昧な答えを、この学園長は許すのか？）

言えばどうなるものかわかったものじゃない。

（答えるなら、第一声は・・・この子が・・・学園長が・・・満足できる答えじゃないと・・・）

祭は最良の答えを模索した。

だが、小さい子供に、小さいお尻で、小さい両手で、床に押し付けらいる異様な状況で。

祭は、思考回路をうまく機能できなかった。

それと、子供とは思えない鋭く赤い眼光に、射ぬかれたせいもあるだろう。

まるで獅子に捕らわれたウサギだ。

体格はまったく逆のはずだが、すべての優位は相手にあった。

「3秒以内に答えよ・・・答えぬ場合・・・」

「！」

あーん。

「噛み殺す！」

学園長は、喉元に開いた歯を押し付けた。

ゾクとなった。

それはまるで、自分が捕食者に捕らわれた、あわれな子羊のように感じた。

あの強大なゴーレムより遙かうえの。

『死の予兆。』

圧倒的。絶対者からの。

『死の宣告。』

死。

死。

死。

死死死死死死死死死死。

それ以外の言葉は、祭の脳裏に、一切浮かばなかった。

「1。」

死のカウントが始まった。力

「お・・・」

「2。」

「俺は・・・」

「3・・・」

「魔女になりたいんです!!」

「!」

祭は、声を振り絞り。思いのたけを吐き出した。

最良の答えなど外吹く風。ただ一つの大切な夢をぶちまけた。3秒がすぎた。

そして学園長は、俺の胸で、ひとしきり笑うと、ニヤツと口を歪ませた。

「男のくせに魔女になりたいくて、しかも魔力までもっておるとは・
・面白い逸材じゃのう？お主・・・」
その雰囲気のにまれ声すらだせない。

「よし・・・」

学園長の顔が、俺に近づてくる。

（死ぬ！）

そう思った時。

耳元で。

「お前を、魔女にしてやろう。」

「え？」

以外な答えが返ってきた。

「本当ですか？」

「ああ・・いいぞ・・だが『条件付きでな。』」

それはまるで悪魔との契約にも感じた。

だが魔女になれるなら、それでもいいと俺は思ってしまった。

1話6

学園長は、頭にタオルを巻き体を持ち上げ、俺の上で仁王立ちになった。

そしてさらに、邪悪笑みを浮かべ。

「さあ・・・入学手続きを始めようか・・・」

こうして悪魔との、いや、学園長との契約が執り行われようとしていた。

「めふいすー」

そのとき天上から、陽気な声が響いた。

「なんじゃフェリス？」

「！？」

天上には、体育座りをしている女性がいた。とがった耳と大きな胸が印象的な女性だ。

普通とは違うのは、背には蝙蝠のような羽根と、お尻には悪魔のしっぽのようなものが生えていたことだ。

（露出の多い服だな・・・）

まるで、小悪魔を連想させるそんな風貌だ。

（そういえば、さつきからまともに、前も見れないなー俺・・・）

「オトコがまりよくもってるのって、めずらしいのー？」

その質問からすると、ずっと天井で体育座りして、俺達の会話を聞いているのだろう。

（いったい何者なんだ？）

学園長と違って見た目は怪しい感じだが、その存在感は真逆。

害意の一欠けらも感じない、赤ん坊のような、そんな印象を受ける女性だ。

（まるで親子のようだ・・・大きさは逆だけど・・・）

「んー・・・まあ・・・めずらしいのう、男が魔力をもっておるのは、

生物理論上ありえんしな」

「でもいるしーここに！」

フェリスさんは、天上から足のつま先で俺を指してきた。

「そうじゃなーい……もしかしたら、理論外で産まれた存在なのかもしれない」

「！」

（理論外？どういう意味だ？）

「じゃあどれくらいめずらしいのー？」

「ネツシーと同じくらいかのう」

「でもネツシーは、とうの300カイくらいで、たくさん飼っているよなー？」

「！？」

「そうじゃったのう……じゃあイエティーくらい？」

「にやはは、それもたくさんいるしー」

（嘘おおおお！？いるの？あの伝説上の生き物たち！？）

「じゃあこいつも飼うか？」

「かうーい。にやはは」

そういつて学園長は、服を着ながら俺をぎよろつと見てきた。

『ゾクッ』

「冗談じゃよククッ」

まったく冗談に聞こえない。

「……あの……学園長……この人は？」

「こいつか？こいつはわらわの使い魔、悪魔のフェリスじゃ」

「よろぴくーにやはは」

「悪魔！？悪魔って実在しているんですか？」

「そりゃ失礼じゃろう本人を目の前に……それに魔界にいけばうじやうじやいるぞ」

「魔界！？魔界ってあるんですか？」

「そんなの常識じゃろ。」

（どこの常識ですか！）

「まあこやつは、わらわのペットみたいな奴じゃ、気にするな」

「・・・ペットですか・・・」

「にやはは、ペットです。わんにゃん」

「なんならこやつに、首輪をつけて散歩してみるか？」

「しません！」

「じゃあお前につけて、散歩してやろう」

「されません！」

（めちやくちゃだ！この人・・・）

「にやははははは」

俺達のやりとりを聞いて、悪魔のフェリスさんは爆笑している。

（でもなんだろう・・・この二人からは、なにか主従こえた信頼関係を感じる。絆を超えたなにか・・・気のせいだろうか？）

「で？ボーヤ」

「へ？・・・は・・・はい」

「まだなにかわらわに質問はあるか？」

「質問？・・・ですか・・・」

「今日とはびつきりに機嫌がいい・・・なんでも聞いてやるぞ」

「・・・」

俺は目を反らしながら聞いた。

「1ついいですか？」

「なんじゃ？」

「服を着てください」

「着ているじゃろ？」

「下もです」

「靴下か？履いておるぞ」

「・・・真ん中です・・・」

「マンなか？ふふ・・・エロいのうボーヤ」

「・・・」

もう言葉もない。

こうして俺の魔女への扉がいが開かれた。
閉まった感じもするけど気のせいであってほしい。

「ふむふむふむ・・・」

俺は学園長に聞かれ、なぜ俺が魔女になろうとしたのかの、経緯を説明した。

もちろん聞かれたからには、正直に誠実に、あの日のことを正確に語った。

だがすこし脚色はあったかもしれない。

たぶん、興奮していたせいだろう。

命を救ってくれた、あこがれの人のことを語るのだ、仕方ない。

「つまらん」

「はい？」

俺の夢はさも当然のごとく、学園長に一蹴された。

「ちょーつまらん。」

こんな反応は初めてされた。

「ゴミじゃな。そんな夢の理由・・・」

ムカッ

「なっなんですか！学園長！理由をおしえてください！」

大切な夢を、あこがれのあの人を、バカにされた気分になり。

ソファーに深く座った、学園長に詰め寄り、つい声をあらげてしまった。

夢を、けなされるのはいいが、夢を目指す理由だけは、許せなかった。

「あっ！」

キッと学園長に睨まれた。

（しまった！？）

天井から。

「まつりちゃん、コドモあいてに、おとなげないぞー」

フェリスさんからお叱りをうける。

「す・すいません」

（つて・・・子供じゃないし！）

「子供じゃないのじゃ！フェリス！」

「にははめんごー」

（もしかして俺を、フォローしてくれた？）

「・・・まったく、魔女を目指す理由がそんなありふれたものすごくどうでもいい理由とは」

「・・・」

「スーパ―つまらん・・・ハイパ―つまらん・・・ミラクルつまらん」

「そこまでいわなくても・・・」

「もつとまっとうな理由があるう・・・」

「どんなですか？」

「世界を征服したとか、入学してエロゲーの鬼畜主人公バりに女の子達を攻

略したいとかのう」

「全然まっとうじゃないです！つて・・・エロゲーってなんですか鬼畜ってなんですか！？」

「なんじゃそんなことも知らないのか？純情田舎少年め！」
「すいません田舎者で。」

「なんならわらが体で、教えてやろうか？」

学園長は俺を視て、いやらしく舌なめずりした。

『ぶるっ』

「え・・・遠慮しておきます・・・」

きつと死ぬほど辛ことをされるだろう。

鬼畜その単語があやしい。

「なんじゃ・・・本当につまん奴じゃのう・・・やはり貴様は、エロゲーの主人公にはなれそうにないのう・・・」

（だからわかりません！）

「まあいい。なりたくなったらわらわにゆえ。すぐにこの学校の色んなキャラの攻略法をおしえてやるぞ」

何を言ってるんだこの人？

「こつみえてわらわは、エロゲーの達人といわれておるからのう」

「?・・・だれにですか？」

「あたし・・・にだけ」

一人か！

悪魔のフェリスさんは、空を飛びながら。

「すごいんだよー、めふいすーまいにちーねつとしょっぱのアマゾンってかわにれんらくしてーかいまくってるのー」

「すごいじゃろう」

なにが？

えへんって感じで、学園長はない胸を張り腰に手をおく。

「そ・・・そうなんですか・・・」

（さ・・・さっぱりわからない・・・こ・・・これが都会というものが・・・）

「それにのうわらわはのう、エロゲーだけはではないぞ・・・」

「?」

「わらわに攻略できない、テレビゲームもないのじゃ」

「はあ・・・そうですか」

（テレビゲームか・・・）

「俺もファミコンとか、ゲームボーイとかもってますけど・・・」

「!??・・・ぶはーッ・・・お主、何者じゃ！いまだきその名を口にするとはお主、通っわもじやのう!」

「はあ・・・」

都会の言葉が、わからない。

ふと祭は、学園長室にあるテレビのデッキを見た。

その中には、たくさんのファミコン、ゲームボーイらしきゲーム機がごちゃごちゃ入ってる。

「………学園長って、ゲームとかも、やるんですね？」

「あたりまじやろっ、こんな所にずっと閉じ込められておるのじゃからのっ、暇で暇でしようがないのじゃ」

「閉じ込められてる？」

「おっとここからは、トップシークレットじゃ」

「はあ……」

（早く入学手続きしないかな……）

「まったくいい世の中なったものじゃ、昔はこの塔の、何百万冊もある……つまらん魔法書呼んで、時間を暇をつぶすしかなかったんじゃが、いまじゃゲーム万歳ーじゃ！ゲーム最高ー！じゃあ」
にぱにぱ笑っている。

（やばいかわいい。撫でてあげたい。たぶん死ぬたろけど……）
初めて、学園長の子供らしい笑顔を、見た気がする。

「……あの学園長はここから出れないんですか？」

「ん？まあ……のっ……出られるんじゃが……本体はでられないのじゃ」

「本体？」

「まあいい……わらわの話は……」

（気になる……）

「で？お主の夢は、ここに入学して女の子達を攻略する……じゃったな？まず誰からいくわらわのお勧めは……」

「勝手にそれを、夢にしないでください！さっきも言いましたけど俺の夢は魔女になることなんです！」

「魔女になつて、女の子を攻略？」

「攻略から離れてください！どれだけ攻略させたいんですか！」

「しないのかつまらん。」

しよぼーんという感じになってる

かわいいーいちいち、妹にしたい。

ずっとこんな感じなら。

「おっ！そういえば今日は、5月10日じゃな・・・！まさかわざわざおまえが今日、ここにきたのは、ここに入学するためか？」

「はいそうですけど、でも驚きました。うちの田舎のパンフレットに、5月10日に行けば魔女になるって書いてあったのに。まさか実は3月3日で2カ月も印刷ミスがあつたなんて・・・」

「アホウ！それは20年前の情報じゃ」

「ええ！！？そうだったんですか？どうりできょう！！」

「どれだけ田舎なんじゃ！お前の故郷は・・・」

「たしかに・・・すこし田舎かも、都会から来た人は、チャンネルが2チャンネルしかないのを驚いていたし・・・」

「ぶうウウっ！

レベル高い田舎じゃのう！！

じゃあ・・・チャンプの発売日は？」

「え？水曜ですけど」

「ぶうウウっ！

こつちでは土曜くらいにはでるぞ」

「ええええ早い！！？」

「遅いのじゃおまえの所が！」

「でも火曜発売って後ろに書いてありますよね？」

「1日ずれてるぞ、お主・・・」

（ただ者じゃない田舎者じゃのう・・・こやつ。）

「あの・・・そんなことより、学園長・・・魔女にしてくる条件ってなんですか？それを満たせば、俺を魔女にしてくれるんですよね？」

「うむ・・・ここに入学させてやる。そして卒業できればなれるぞ。」

（やったー！）

「それで・・・条件とは」

『ニヤッ』

学園長の口元が、いやらしく歪む。

「なに・・・かந்தんな条件じゃ、それは・・・」

1話7

「ここに女装して入学してもらおう。」

「?!.....ええええええ!!!!それは無理ですよ!?!お・男の格好ままじゃダメなんですか?」

「だめじゃ」

「な・なんでですか?」

「それはわらわがつまらないから.....じゃなくて.....困るからじゃ!」

「いま.....つまらないって?」

「魔女委員会というモノをしっておるか?」

(無視された!)

「し・.知りません.....」

「10年ほど前にできた魔女による魔女のための委員会じゃ」

「.....その委員会が俺の女装になにか関係があるんですか?」

「おおありじゃ!」

学園長は興奮したように言った。

「まったくあやつら!わらわがこの手でこの魔女学を開いたものに.....勝手に委員会なるものを作って魔女の法律や規則を勝手に決めおつてからに。」

(魔女の裁判所みたいなのところかな?なら弁護士も魔女いるのかな?)

「そして一番カンに障るのはじゃな。わらわにいちいち、生徒への指導方法を口だしてくることじゃ!時間割りに始まり.....魔女の作法!魔法の教え方!学校内の規則まで。まったく誰が魔法を教えてやったと思っておるのじゃ!恩知らずが!」

(たしか、樹さんが言っていたけど、今は学園長は、先生職をやめて、ここの卒業生の魔女の先生が、魔法を教えているって。.....じ

やあその前は子供のように怒る、この学園長が魔法を教えていたんだろうか・・・想像できない。」

「学園長、疑問があるんですけど?」

（なんじゃ?言ってみろ）

俺は昔から、気になつていたことを聞いてみた。

「魔法つて一体なんなんですか?どういう原理で発動できるんですか?」

「・・・お主はなぜ、この宇宙が存在すると思う?」

「・・・しりません・・・!もしかして知っているんですか?」

「しらん!まあ・・・そういうことじゃ」

「?」

「つまりーめふいすに、もよくわからなーいってことだよー」

「そのとおり!」

まったくわからないのに、なぜいちいち、ない胸を張るのだろう。

（わからない。）

「むっいやらしいのう・・・いまわらわの魅力的な胸をガン見たのう」

「し・・・してません!それにするほど・・・」

（はっ!）

「むっ・・・ないと申すのか?」

「そ・・・そんなことは・・・」

（ありますけど・・・）

「めふえすはペチャパイ!ペチャペチャパイ!」

フェリスさんはいつのまに、俺に後ろに回り込み。

胸を揉みまくった。

「ふえ!フェリスさん! なっなにする・・・ひゃ!

する・・・ひゃ!・・・んっ!です・・・ひゃかつ!」

「んー・・・」

フェリスさんは、俺の胸を吟味するように揉み。

「にゃ、こっちのほうがめふいすよりおおきにゃー」

『ぶちっ!』

なにかが、ブチ切れた音がした。それは。

「フェリス……!?!」

学園長だ。

そして、二人による、追いかけてこが始まった。

「こんぷれつくすこんぷれつくすーめふいすのこんぷれつくす! ないのがこんぷれつくす! やっほーにゃほー!」

フェリスさんはスキップしながら、変な歌をうたいだした。

「だまれ! あと1000年くらいすれば、わらわも大きくなるわ!」

(どれだけかかるの!)

(とういか・胸が小さいのがコンプレックスなのか? ・ ・ ・ なんかかわいい。)

「クスッ」

「なっ!?! なにを笑っておる! お主? わらわの数千年の悩みを、馬鹿にしおってからにー!!」

(小さい悩みなのに! スケールでかつ!)

「ご・ごめんなさい、なんかかわいいと思って・・」

「か・・・かわいいじゃと!?!」

(しまったつい本音が!)

「・・・」

学園長は、急におとなしくなり。赤く赤面してすこしモジモジして

る。

「まったく・・・かわいいなどと、男に初めていわれたわ・・・」

「ご・ごめんなさい」、

「ふん・・・お主は事実をいったまでだろう・・・あやまるな!」

「はあ・・・」

(不死といっても子供だろ、なんか凶悪だけど凶悪に見えない。これが、ばっちゃんが言っていた凶悪かわいいか?)

「まさか・・・わらから攻略してくるとは、お主やはり、通つわものじゃな・・・」

「はぁ・・・」

（なにかすごい誤解されてないか？・・・勝手にしたことになってる）

「・・・まあいい・・・話を戻す、なぜお前が女装しなければいけないのかというと、魔女委員会が決めた魔女法律というものがあってな・・・」

「魔女法律？魔女に対する法律ですか？」

「うむそうじゃ！たぶん・・・この第217条は、絶対ありえないことなので誰も覚えておらんだろうが、それが原因じゃ。」

「そ・・・それは・・・」

「それはのう・・・魔女法律第217条、男は魔女になることはできない」

「！！！」

「それを破れば、なんらかしらの制裁を受けるじやろう。破らせたわらわにではないぞ。破ったお主にじゃ」

「！」

「まあ・・・そもそも・・・わらわの力は、すべての魔女が束になつてもかなわないくらい強い、罪など外吹く風じゃがなフハハ・・・」

「ドクサイシャー」

「お主も・・・実力で魔女委員会をネジ伏せて！・・・法律を替えてしまうという手もあるがな。」

「やつちやえー」

「や・・・やりませんよ、できても！」

「なら女装すしかないな。」

「魔女学に入学するだけならいいんじゃない？・・・魔女になるわけじゃないんだし・・・」

（ああ、ついでに417条魔女学は男子禁制ともある）

「うつつ」

まったく、男はここに入れぬのなら、217も417もいらぬはずなのになー、法律の無駄づかいじゃ。今回は、それがおまえにとつて仇になったがのう・・・入れず、なれず八方ふさがりじゃな。どうする？」

「破ったばあいは？」

「破れば魔女委員共の犬である、魔女騎士が来て、捕縛され執行猶予もない速攻牢獄いきじゃ。最悪は死刑もありえるのう・・・」

「死刑！？」

（しかも魔女騎士・・・それだけは・・・）

「わらわは、おまえがどうなろうと、どうでもいいのじゃがな。おまえのような極上の素材が失われるのは魔女界にとつても、大きな損実になるじやろう、それは避けたい。」

「そ・・・そんなに俺の才能を、買ってくれてるんですか！」

「うむ」

（違う意味でだがな・・・ククッ）

「じゃからお主が女装をすれば万事解決じゃ。お前も死ぬこともはなく、魔女界もうるおうというわけじゃ。」

「・・・」

「ただおまえが、ガマンすればそれでいいことなのじゃ。」

「た・・・たしかに・・・」

（なにがたしかにじゃ！調子にのりおつてからに・・・お主のようなおもしろい素材、みすみす逃がす訳なかるう！）

「それで女装すれば、男でも入学できるんですか？」

「はあ？なにいつておるのじゃ、いままでの話、聞いておつたか？そんな訳ないじゃろ・・・」

「でもさつき、女装すれば入れるって・・・」

「馬鹿かお主は！わらわは女装すれば、魔女学にはいれると、魔女になれると、いつておるのではない！」

「お主が女装して女として振る舞い、卒業まで魔女委員会にバレすごせれば、魔女になれるといつておるのじゃ・・・」

「えええええ！！？そんなの無理ですよ！俺！女として振る舞ったことないですし・・・」

「なにをいつておる！都会の男はな・・・生きているうちに一度は女装して。女として振る舞うものなのじゃぞ・・・（嘘）」

『ガビーン』

「都会！・・・恐ろしい」

「そうだったのかーびっくり」

（んなわけあるか、馬鹿ども！）

「魔女になつたあとも、バレたら即バッドエンドじゃが、まあ・・・夢がかなつたらあとなら、死んでも本望じゃろ・・・くくっ」

「でも無理です・・・なにか他の方法はないんですか？」

「ない（キツパリ）」

「そんな～・・・」

「その程度か？」

「え？」

「お主の魔女への思いは、その程度かと聞いておるのじゃ！」

「！」

「魔女になりたいのじゃろっ・・・あこがれのその白い翼の魔女のよう、なりたのじゃろっ？」

「・・・はい！」

「なら女装して女と振る舞い、卒業までバレずに魔女になる覚悟くらい持て！」

「！・・・そ・そうですよね・・・たしかに・・・そうだ！わかりました俺やります。」

（・・・ビククリするほど、あつかいやすいのーこの男・・・）

「俺の魔女への思い、この学校にぶつけてやります！」

「女装してか？この変態め」

「変態じゃないですよー！」

「なにを言つておる・・・夢を叶えるため、とかかつこつけて、ノリ

ノリで女装して、女のパラダイスに入り込もうとする男は、どこからどうみても変態じゃ」

『がびーん』

「異論は？」

「・・・まったくもって、ありません」

『ガクッ』

俺は、膝をついてがつくりした。

『ポン』

その時！後ろから肩を叩かれる。

振り向くとそこには、悪魔のフェリスさんがいた。

（もしかして・・・俺を励まして・・・！）

「へんたい」

がちゃーーーーーん

なにかが壊れるのを感じた。

「あの・・・学園長・・・もし入学途中で男だとバレたら、どうするんですか？なにか対策は？」

「死ね」

「死ねエー！！？」

「気性の荒い魔女見習いたちじゃ、自分たちの中に女装している、変態男がいるとわかれば、縛られ吊るしあげられ、サンドバックじやろうな（にこ）」

「うわ~~~~っ！！」

「かりに・・・命が助かって、ニュースやネットで犯罪者として、お前の顔と名は世界中に広まり、社会的抹殺は確実じゃ」

「あうっ！！」

「むしろ、サンドバックの時点で、死んだほうがマシと思えるくらい、地獄がまっているじゃろうな。」

「おうっ！！」

つぎつぎと、精神的ボディーブローが、致死クラスで襲ってくる。

「バレたら、死だほうが楽というわけじゃ。切腹用の短刀を、あとでネットで買って送らせよう、わらわからのサービスじゃ」

（それ逆サービスウウ！）

「・・・ううううっ・・・」

（やばい心が折れそうだ・・・）

俺は、がっくりとうなだれた。

「心配するなボーヤ・・・わらわがついている。」

「が・・・学園長お・・・」

はじめて学園長が、頼りに見えた。

「骨はひろってやる。」

がびーん

「じゃあ、わたしがそれをたべるーわん」

骨する残らない。

「はあ〜」

ため息しかでてこない。

「なんじゃなんじゃ・・・なさけないのう、やる前から失敗することを考えおってからに。そんなんじゃ、女子生徒全員攻略の夢など、夢のまた夢じゃぞ！」

そんな夢は、夢のまた夢でいいです。

「・・・やります」

「お！」

「俺は女装して魔女になります！」

「いい目じゃ・・・」

「・・・（キリッ）」

「変態の目つきじゃがな」

がくつ。

「にやはは」

「・・・お主の意思はゆるがない、そう考えていいのか？」

「はい」

「・・・まったくあきれた変態じゃな・・・まずはコレを飲め。」

そういつてなにか、黒い丸薬を、親指でピンっと俺に飛ばした。

キャッチ。

「・・・これは？」

「飲め」

水の入ったコップを取り出し、俺に渡した。

「あのなんなんですか？これは？」

「魔女になるために薬じゃ」

「副作用などまったくもって絶対ない。安心して飲め（にぱー）」

（嘘だ！絶対ある！）

「どうした飲まんのか？」

俺には、飲む以外の選択肢はないようだ。

昔ファミコンでやったドラゴンファンタジーで、そんな理不尽な選択肢があつたことを思い出した。いいえを選びつつけても、結局は
いを選ばなければならぬ、そんな状況を。

（なんだかなー・・・）

俺はそれを飲んだ。

『ゴクリ』

「！・・・おいしい・・・」

「そうじゃろうそうじゃろう・・・さてどんな副作用がでるのか
のう（わくわく）」

「やっぱり、絶対出るんですか！副作用！」

「……そもそも……一体この薬に、どんな効果があるんですか？」
その時。

「！」

頭の後ろのほうで、ワシワシしてきた、そして。

『ぶわー』

つと俺の髪の毛が伸びていく。

「なっ・な・な・なんじゃこりゃー！！？」

「わらわの作った髪が伸びる薬じゃ」

「え？これが副作用じゃないんですか？でもなんで髪を伸ばしたんですか？わざわざ……」

「髪を伸ばしたほうが女っぽく見えるじゃろ？女とバレないようにするためのわらわからの配慮じゃ」

「……そうかもしれませんね……短いよりはばれずにすむかもしれないけど……でも」

気になったことがあった。

「そんな物、どうやって作ったんですか？原料は？」

「ん？確かお被いでもってこられた、髪が伸びる呪いの人形を、すりつぶして作ったものじゃ」

「ぶっ！！？」

「なっ……！なんてものを、飲ませてくれてるんですかアアア！！」
（呪わせてくれてるんですかアアア。）

「いいじやろう別に、副作用もなくちゃんと髪も伸びたんじゃし。」

「……」

俺は、伸びた髪の毛を一本つまみ、プチっと抜いてみる。
すると。

『わさー！』

「！・・・髪の毛が一瞬で生えた!？」

「それはきつと、副作用じゃな。」

「副作用というより呪いですよ！コレ！」

「似たようなものじゃろ？」

「ぜんぜんちがいます！」

科学と呪術ぜんぜん交差してませんよ。

「解呪方法はなにかないんですか？」

「ない」

がーん

「まあ死ぬまで禿の心配はないのじゃ、よかったではないか、わらわに感謝しろ！」

初めてみた、人を呪っておいて感謝させる人。

「300年もあれば自然に解けていくじやろう・・・」

「とつくに体が、自然風化してますよ。」

「呪術としては、まだまだ軽いほうなんじゃがな・・・文句があるなら、重いほうも受けてみるか？」

「軽く呪っていただき、ありがとうございました。」

感謝した。

「うむ」

そのとき。

『ビ—————ビ—————』

学園長室に、10時間前に聞いたあの、けたたましい警報音が鳴り響く。

1話8

「まったくうるさいのう．．」

「うるさにゃ」

「なんですかこの音？なにかあったんですか？」

「緊急信号のようじゃな」

そう言つと学園長は、机にある、線がつながっていない黒電話の、受話器をとると。

「どうした？なにがあつたのじゃ？せつかく遊んでいたというのに．

」

（遊ばれてたの俺？）

「！．．なんじゃと．．．」

学園長が初めて厳しい顔をした。

「ふむ．．そんなことが．．わかつた切るぞ。」

『がちゃ』

「一体．．なんの電話だったんですか？この警報に関係あるんですよ？」

「．．．別にどうということはない。ただ近くの飛行船が、運転不能になり暴走し、滑空して、このままでは街に落ちるいう話じゃ」

「なーんだ．．．．．って、大変じゃないですか！！？」

「そのようじゃな．．」

「助けましよう！」

「どうやってじゃ？わらわはこの塔からでることはできぬ。」

「じゃあここにいて、魔女学の生徒に知らせてみんなで」

「ダメじゃ！」

「なんでですか？」

「わらわにはたまに、人の死相が見えるのじゃが・・・」

「死の予告みたいなものですか？」

「そうじゃ・・・お主からは、それが見える・・・」

「そうですか・・・それで場所は？」

「なぜ行く？助けたところで、お主にはなんの利益もないじゃろ？夢を叶える前に死んでいいか？」

「しんじゃうよー」

「俺は、救いたいから行くんです。利益とかどうでもいいです。それに死にませんよ・・・夢叶えるまで絶対に！」

「・・・そうかつくづく、お前たち親子は・・・」

「え？」

「いや・・・なんでもない。」

学園長は、指をスツと壁に向けた。

「あつちじゃ」

その瞬間、不可侵で絶対硬度をほこる、塔の壁に、俺がちょうど通れるほどの、穴が開いた。

「ありがとうございます、学園長！いつてきます」

「しつかり死んでこい」

「死に気でいきます。これくらい救えなくて、魔女になんかになれませんよ」

俺は穴にむかった、下を見ると。高度5000メートルくらいの高さがあつた。

『ひゅおおおおおおー』

風で、祭の長い髪がなびく。

（こんなところまで、昇っていたのか・・・）

「どうしたのじゃ？飛行船はここからまっすぐ10キロ先じゃぞ・・・これくらい飛べんようでは高度1000メートルの飛行船を救うことなどではしないぞ？」

「飛びます！」

「自殺する気か？」

タツ

そのまま俺は5000メートル下の地面に飛び降りた。

「わおーじさつー」

「違うな」

「にゃ？」

祭は、空を滑空しながら精神を集中させた。

「はあああああああー！」

魔力を全身に張り巡らせ。ソレを発動させた。

『ダークエンジェル
闇翼』

少年の背に、黒い翼が展開した。

「ほう・・・」

「わーお カラスみたい！わたしのはねににてるーかーかー」

『ぶわっ』

その魔力で作られた、黒い翼を羽ばたかせ、祭は、まっすぐ飛行船へと飛び立った。

それを見守る二人。

「ふふ・・・これで確信したぞ・・・やはり奴はあの女の息子じゃ。」

「あのおんな？だれ？」

「苗字もおなじ、魔力の質もそっくりじゃきわめつけはあの魔法・・・」

・

「だれだれだーれ？」

「世界一有名な魔女じゃ・・・世界を一度滅ぼしかけた・・・大魔女
くろひつじ ゆうやみ
黒羊 夕闇」

「わーお、あくのサラブレッドだーあのこー」

「たしかにあの女の息子なら、男でも魔力をもっている、不思議ではないのう・・・」

「そうなのー？」

「うむ、それだけあやつは異質じゃった」

「どうゆう意味で？」

「いろんな意味でじゃ？」

そういつて学園長は、笑みで顔を歪め。

「久しぶりに楽しめそうじゃな・・あの人間。これからおもしろくなりそうじゃ・・ククッ」

「かわいそーあのこメフィスにきにいられてー」

「なにをいつておる？かわいいそうで済ます気ないぞ（にや）」

「うわっ！ゴクアクー」

「さて・・まずはこの状況をどうするか見せてもらうぞ・・黒羊祭」

学園長は何もない空間から水晶玉を取り出し。そこに何かを映し出した。

そこには祭の姿があつた。

黒羊祭は、黒い翼を羽ばたかせ。音速で最速で迅速に。10キロ先の飛行船にたどり着いた。

飛行船は、高度400メートルを滑空していた。

「・・・おおきい・・」

（こんなものどうすれば・・）

「・・・・・ふう」

（落ち着け俺ここであせつてもしょうがない、まずは冷静に落ち着いて状況確認だ）

キヨロキヨロ俺は、冷静に落ち着いてあたりを見回した。

（まずは飛行船のいまの状況は・・墜落まであと2、3分つて所か・・飛行船にのっている乗客は約200名・飛行船を支えるにしてもいま俺の力じゃたぶん無理だ・うまく減速させることくらいしかできないだろう・人のいない場所に降ろさないと・・

飛行船がいま、滑空している方向はたしか・・・

「！」

（覚えがあるたぶん、俺がこの本州に来た時に利用した、羽田空港だろう。船長もできればそこに降ろしたいとおもっているはず。あそこは住宅外も少ないはずだし・・・だがどうみてもあそこまでは、いくのは無茶だ・・・このスピードで滑空すれば、あと1キロもたない。自滅はみえている！ならもつと、ちがう別に場所に降ろさない・・・）

祭は飛行船のさきに、先回りして街を観察して降ろせる場所を探索した。

「ないない　ない・・・くっ！どうすれば・・・」

『！』

（あそこだ！）

その頃、じょじょに滑空する、飛行船のコントロール室では

「クソったれ！いうこと聞かなねエ！！どうなっていやがるだ！てやんでエー！」

（このままじゃ2、3分も持たず、墜落しちまおう！）

飛行船の船長、真崎　大輔（78）は、コントロールの効かない、愛船に悪態をついていた。

彼の船長歴60年、大ベテランだ

昨日、誕生日で、愛す、る妻（77歳）と迎え、愛を誓いあっていたのに。

（なんでこんなことになっちまったんじゃ！）

白髪白髭サントにも似た、風貌の船長は、いよいよ自分と、船と乗客の最後に絶望し・・・謝罪した。

この責任はけっして、彼のせいではなく、整備員の整備ミスという、一番ありがちで一番やってはいけない、おこないのせいである

が。この状況でそれがわかる訳もない。

「ちくしょー！こんなくだらない、最後をむかえさせちまうなんて・すまねエーすまねエー」

彼は乗客200名に対して詫び続け。彼は男泣きしながらその場で懺悔した。

『こんこん』

「！」

『こんこん』

コントロール室の窓から音が

「幻聴か！？クソっこんな時に・・・」

船長はその音、を精神錯乱状態による、幻聴だと判断したらしい。

「それとも・・・このなさけない船長に、死神のおさそいかねエー・

・こんなヘマをしたワシを地獄へと案内する・・・」

そう思い船長は、懺悔で伏せて顔を、誰もいないはずの、窓の外を見ていると、そこには。

「うぎゃああああ！！黒い翼の女の死神！？ほんとにいた！」

「死神！！？（がーん）

ちがいます魔女ですよ」

「！？

ほ・・・本当か？・・・魔女だと！・・・おいおい魔女さんだよ・・・ははっ助けにきてくれたのか？」

船長はさきほどの絶望モードから、一気に希望が湧いてきた。

「いや違います」

「はい？」

「実はまだ見習いで、正式な魔女じゃないんです。てへへ・・・」

「そ・・・そうかじゃあ魔女学の生徒なのか？」

「はい・・・いや・・・それもちがいます」

「はあ？」

「いや・・・まだ正式に入学したわけじゃないから・・・そうでね・・・

いまは……魔女希望者です。」

「……」

また絶望モードに突入した。

「と……とにかく……君は、この絶望的状況をなんとかできるのか？」

「できません。」

「！？」

（な……なんなんだこいつは？）

「俺ができるのは、この船を支え、この先一キロ先の巨大交差点に降ろす、補助をするくらいです。」

「馬鹿な！？交差点だと！」

「はい、あそこならこの飛行船を降ろす幅は、十分あります」

「だが無理じゃ！交差点には人がたくさんいるぞ！」

「ここにも人がたくさん乗ってます」

「！」

（正しいかもしれない……このままじゃ墜落するのは必然。ならこのまま彼女に支えてもらい、交差点に降ろし乗客を助けるのが必然。そのほうがまだ幾分被害はすくないのかもしれないかもしれん。だが失敗すれば乗客と街の人間その両方が死ぬことになる。ワシは……）

彼は選択をしないと決けない。

降ろすか降ろさないかどちらかの選択を。

被害の選択を、命の選択を。

この状況で交差点に降ろす選択をしたとして、たとえ犠牲がでて罪に問われる可能性は低いだろう、だが。裁かれずとも、それによつて犠牲ができれば、それは罪なのだ。

『心の罪』。

まごうことなきそれは、自分の抱えるべき罪なのだ。

（くそがッ！！犠牲がでて、自分が生き残るそんな状況になれば、一生……死ぬより辛い贖罪を抱えることになる……それに耐えられるのだろうか？ワシに……そんな……死よりつらい責め苦

に耐えられるのだろうか？ならいつそ・・・）

どうしても、弱い考えが、船長の頭をよぎってしまふ。

それはどんな屈強な者でももつ、弱さだ、鍛えようがない。

（もうだす答えは・・・一つしかないなのに・・・でも・・・）

それでも答えを躊躇した。

そのとき、窓の外の、黒い翼の少女は、船長の心を察したのか。

「大丈夫です。俺が下から支えてゆっくり降り降ろしますから、交差点のみんなも非難する時間は、できますよ。」

船長の脳裏に、希望が湧いた。

「絶対成功させますから、俺を信じてください」

もう怖くない。さきほどの死の選択を、迫られた船長は、彼女に選択をゆだねることで気がらくになった。

『だがそれは嘘だ』

「わかったそこに降ろそう・・・たのむ、下から支えてバランスをとってくれ、あとはワシがなんとかする。」

「わかりました。」

「約束する、この船の船長としての意地と、君の決意にかけて、全力を尽くすことを誓う」

「はい」

そう力強く、船長は宣言した。

（まったく・・・今時の子供は・・・彼女の言葉は嘘だろう。ワシもだてに長いこと生きておらん、あれが嘘だとわかるくらいの、人生経験はしてきたつもりだ・・・たぶんこの子の力ではきっと、できて補助が精一杯だろう・・・もしかしたやってみたら、補助するできないかもしれない。だがこの子はいった、絶対成功させると。ワシに勇気と希望を、与えるために、この子は選択したんだ。例えば交差点に降ろすことで、被害がでようと、飛行船の乗客を助けると・・・それで被害ができればその罪をすべて自分で背負うと・・・普通

ならこう言うはず)

「交差点に降ろすか降ろさないかは船長あなたが決めてください」
と

(命の選択という辛い役目を、ワシにゆだねるはず。それが正解だ・ワシは大人なのだ子供背負っていい軽い罪などではない!死にかけの老人が、墓場までもっていきような重い罪だ!まったく・・・いまどきのガキは・・・ワシもその罪・・・背負う覚悟ができたぞ!)
そう思えた、それは彼女がいたからこそだ、一緒に背負ってくれる相手がいたからこそ。

(見た目は、その黒い翼で、悪魔にも見えたが・・・なんてことはない、実際はその逆。)

「なああんた名前はなんだ?」

「黒羊 祭です。」

「そうかい祭ちゃん、ワシは真崎 大輔だ、あんたはワシの・・・」

『天使だ』

「天使?ちがいます」

背の、黒い翼を羽ばたかせた。

「俺はただの、魔女希望者です」

そう言うと、黒い翼の天使は、コントロールルームの窓から船底に移動した。

1話9

飛行船の船底の真ん中まで飛ぶと、両腕に力一杯力をこめて船を支えた。

「えいやあああああああ」

魔力を持つ者は、人より遥かに強い力をもつ、それはなぜかというと、体に流れる魔力が、人の筋力を強化し尋常ならざる力をもたらすからだ。

それは、人を超えた力。

だが所詮、は一人の人間にしかすぎない。奇跡を起こせる訳ではない。

祭は全力で、全開で、全身に、力と魔力を込めた。

が、飛行船はウンともスンともせずただ。

「はあはあ」

祭の全身に、強烈な疲労が襲うだけだった。

さらに。

「こん……ちくしょう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

ダメだった。

「ぜーぜー」

無理なのか、無駄なのか、無知だったのか、こんな巨体を支えるには、祭は。

（俺には最初から、すべてを救うなんて、無理だったのか？）

一瞬あきらめの気持ちだが、祭の脳裏をよぎった時。

船内から恐怖の、叫び声が聞こえてくる。

『きやああー助けてー』『いやあああ死にたくないよー』『マ

マーうえーん』

「くっ……そっ……がああ……」

筋肉が軋む音が聞こえる。

呼吸がしづらく、息がつまる感じがする。

それでも彼はあきらめたくなかった。

彼が、乗客を一人一人救出をすれば、数人は助かるはず。

それ、が正しい答えだろう助けられる命を助ける。他の命は犠牲にして。

それはさきほど、彼がとった選択となんらかわらないはず。

だが祭はいま、この選択だけはしたくなかった。

（たとえこれが、間違っていた選択だとしても、もう全員を助けるって決めたんだ！あのとき犠牲がでることになっても、交差点に降ろすそう選択した時から、もうこれ以上の切り捨てる選択は、しない。あの時の覚悟を無駄にしないためにも、俺の選択によってこれからであるう犠牲のためにも。俺ができることは、自分を信じて、いまできる最善の手を尽くす・ただそれだけだ！）

誰かを救うために、自分の命をかけるのは間違いなのだろうか？

自分の命を救うため、誰かの命を切り捨てるのは正解なだろうか？

それはどっちも正解であり間違いでもある。

優劣など付けられない、つけてはいけない。

命を賭けた者を非難するのも。

切り捨てた者を非難するのも。

人という存在がしていいものではないのかもしれない。

それを確実に非難できるとすれば、神と呼ばれる存在だけだ。

ならそれに迷った時、人はどうすればいいのだろうか？

人は心で感じたままに動くことが、大切なこともある、

（正解も間違いもないなら、感じたままに動けばいい。気楽だな、

どう選択しようと、間違いではないのだから、正解でもないけどが

正解することが大事じゃない。自分が本当に思う道をいくことこそ

が、大事なんだ！）

そして彼が選びとった答えは、結果的に誰かをたすけるために、自分の命を切り捨てることになった。

彼は救えると信じた。

自分なら、絶対救えると信じた。信じた信じ抜いた。何事も、決めたら常に前向き。できると信じたら、絶対できる。常に彼はそう考えてきた。

できないとイメージしながら、それをするのと。できるとイメージをして、それをするのでは。

成功率は後者のほうが、格段に跳ね上げる。

脳というモノは、イメージした結果により近づけようと働く。

彼はそれを無意識にわかつていた。

成功するイメージをしる。

救ったあとのイメージをしる。

これからなすことをイメージしる。

すべてを成せるイメージをしる。

俺ならできるとイメージしる。

彼は、全魔力を、全神経に、全部を、全集中させた。

新たなる魔法の想像と創造を、イメージした。

彼がこの窮地に救う、てだては1つ。

それは新たなる魔法を身につけ、それで救う。

通常1つの魔法を、新たに身につけるには、最低10日ほどかかる。その魔法おぼえるための基礎訓練、応用訓練、イメージ訓練、実践訓練、これをクリアして、はじめて新たなる魔法を身につけられる。それをあと2分足らずで身につけるに、は奇跡にひとしい所業だ。彼の才能をもってしても、たとえ塔で訓練したとしても、この魔法を会得するには最低2週間はかかる。

『奇跡を起こすしかない。』

だが奇跡など、所詮ドラマや漫画でしか起きない、フィクションのようなもの、現実には滅多におきない結末だ。

だが彼は、それを起した。

強い意志と、才能と、対価と、犠牲によって、それを成した。

『大墮天使の翼（オールウインガー）』

彼の持つ唯一の魔法。

ダークエンジェル
闇翼

その10倍近い翼を、船体そのものに生やす魔法だ。そうすることとて、船底から支えるよりずっと、バランスを取ることができた。

この魔法は、自動制御で、コントロールされ、このままゆっくりとこのさきの巨大交差点に、着地するだろう。

成功したのだ。

まるで奇跡だが、これは奇跡でもなんでもなかった。

みせかけの奇跡だ

この、みせかけの軌跡は、彼の犠牲による、対価によるものだった。急激な魔法習得のための、寿命の低下と、全魔力の消費。

その結果かれは。

グラッ

空中での体制を失い、黒い翼と共に、地面に落下した。

上空200メートル、魔力で肉体を強化していればあるいは、助かったかもしれない。

全魔力を消費せず、わずかな魔力をのこす方法もあった。

だがその方法をあえて、彼は使わなかった。意図的に。

落下して死ぬとわかっていて、この魔法を想像し創造しイメージしたのだ。

彼は魔法については、本などを読んで、ある程度は理解していたが、その深淵についてはほとんど無知だ。

だが、心のどこかでわかっていた。

『命を賭ければ救えると。』

魔法とは心の力・精神の力だ、心とは精神とは命を燃やしつくす時。もっとも光輝く。

それを彼は、このたくさんの、命が尽きようとするこの場所で、直

感したのだ。

あらためていうが、これは奇跡でもなんでもない。

寿命という対価と、彼の命を賭けるという、覚悟により増幅した精神力によって、この大魔法を成功させたのだ。

だが奇跡に近い結末をおこした結末は死。

皮肉なことに、命をかけなくては、この魔法は発動の予兆さえ、しなかっただろう。

死の淵でこそ、人の精神は一層高まる。

『命をかけて救う』。

その覚悟が、意思が、思いが、この魔法を具現させた。

奇跡でもなんでもない、ただのちっぽけな人間の、意思の力だ。

奇跡とは真逆の力。

彼が、この船を救うために、選びとった答えは。

別に、命を犠牲にして、救おうというようない、たいそうなものではない。

ただ、たとえ命を落とすことになったとしても、この船のすべを救いたい。

そんな思いだけだった。

死にたくはない、でも死なせたくない。

後者が圧倒的膨れ上がり、彼にこの行動をとらせた。

だが彼は、後悔しているのだろうか？

いま落下し、死を迎えるようとする彼は、自分は愚かだと、思っているのだろうか？

なんて馬鹿なことを、したんだろうと、後悔しているのだろうか。

そう彼は、死ぬことに後悔していた。

ただそのベクトルは違った。

後悔しているのは、自分の魔法を最後まで、見届けられなかったことに対してだ。

難しい呪文だった、成功したとは思うが、100パーセントの確信もない。

だから死ぬ前に、見届けたかった自分がおこした奇跡と呼ばれるほどの、人の意思の力を。

だが奇跡はおこる。起こるものなのだ。

奇跡が起きないのなら、奇跡という言葉は、そもそも存在しない。だから奇跡おこる。

だが、信じるものにくるのではない。運がいいものにくる。

それが現実だ、信じたものにも、信じなかったものにも、平等にくる。

半々、ヒフティーヒフティー。

残酷な現実だ。

だが本当にそうなのだろうか？

彼は奇跡など信じない人間だ、だがときには奇跡を信じる人間だ。そんなあいまいな彼に、奇跡はおこるのだろうか？

関係ない起きた。

信じたい、この奇跡はきつと、少年が起こした。奇跡と呼ばれるほどの、意思の結末がおこした。

『奇跡という名のプレゼントだと』

それは否定しようがない。

否定したところで、もうおきた奇跡なのだから。

少年は助かった。

いや助けられた。

片手を片手でキャッチされ、空中に宙づりになっている状態で。

もう片手には、コンビニの袋を持つ白い翼の魔女に。

あの時と10年前とまったく同じ光景だ。

少年が飛行船から落ちた。あのときとまったく同じ。

これを奇跡と呼ばず、なんと呼ぼう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265ba/>

魔女と僕と魔女

2012年1月13日16時47分発行